

月状三角骨障害の診断と治療

手関節の尺側部痛は手関節をひねる動作などで悪化することが多く、交通外傷や労災・スポーツ外傷などで生じる一方、尺骨突き上げ症候群のような慢性疾患も存在し、正直「わかりにくい」分野であることは想像に難くありません。また、尺側部痛を生じる病態は多数存在していますが、その中でも今回、月状三角骨障害をテーマとしてエキスパートの先生にお願いして執筆いただきました。私が知る限り、このテーマに絞っての特集は今までになかったと思われます。

おそらく純粋な月状三角骨障害の診療に当たることは、多くの整形外科医にとっては頻度として多くはないと思われます。しかし今回、解剖からリハビリテーションまで月状三角骨障害にフォーカスして解説していただいております。本特集号を通読することで月状三角骨のみならず尺側手関節痛全体としての理解に通じるものと確信しています。

具体的には「解剖」「バイオメカニクス」「理学所見」「画像診断」「手関節鏡」「尺骨短縮/debridement」「Capsulodesis」「縫合（固定含む）」「作業療法」の項目で、実臨床から最新の話題まで概説していただいております。月状三角骨障害を理解するために、その解剖学的構造・メカニズムに精通し、複数ある診断方法の特徴を把握して診断方法に造詣を深め、各種治療方法・後療法が学べるような構成となっております。

かつて手関節の“腰痛”と称された手関節部尺側部痛に関しても、MRIなど画像診断技術の発達・バイオメカニクスを含む解剖学的な知見が深まり、様々なことが判明してきています。手関節鏡技術の発展も伴い、同部位の障害に対して鏡視下での靱帯縫合などの手術が今日行われるようになってきています。このような状況の中で、本特集が皆様方の日常診療に少しでもお役に立てれば望外の喜びです。

最後になりますが、ご多忙のなかご執筆いただいた先生方には心より感謝申し上げます。

(建部将広)